伊勢物語
下

むかしおとこいもうとのいとおかしけ
なりけるをみをりて
うらわかみねよけにみゆるわかくさを
人のむすはむことをしそおもふ
ときこえけりかへし
はつ草のなとめつらしき
ことの葉そうらなくものを
おもひけるかな

昔いとわかきりはあぬしれるともたち
こともかくして月日をみくうちゆまなる
みかきに月をともそへしこれらこの
つもれる人のおもひとゝめ
けしからぬ男親しりけりける
人をうらみけり年をへて
人これと親しかしかはりてさく
いろまの外なりけるゆかをむ
むしつまるき人といてとふひれら事
まい親きくうひかんかはわすめくし

かきりなくうれしくまたうたかはしかり
けれはおもしろかりける
桜につけて
さくら花けふこそかくもにほふとも
あなたのみかたあすのよのこと
といふ心はへもあるへし
昔月日のゆくをさへなけく男三月の晦か
たに
惜しめとも春のかきりのけふの日の
ゆふくれにさへなりにけるかな

山しあしきりさりくまてとありけり
ことゝもえきゝしあり
わかちなくしまらしたるあやうらい
ゆきくへんちくりを
よしかはらはるくしてゆくまゝに
人をいはふるもすゑのめいぬ
つきゐれやわかれみしていはそれ
かりいゝるゝもいくしあり
おほかくさいふく一つ秋くつく
こゝろやしきいう

ひとしもかゝることは世のことわりや
ありけん

一 当地にて人の武蔵の筆にて人々かたり
うるしく人は秋の夜のやうにて
色もうちかねて人にもや

むかしおとこありけり人のもとよりかさり
ちまきおこせたりけるかへりことに
あやめかり君はぬまにそまとひける
われはのにいてゝかるそわひしき
とてきしをなんやりける
むかしおとこあひかたき女にあひて物
かたりなとするほとにとりのなきけれは
いかてかは鳥のなくらん人しれす
おもふこゝろはまたよふかきに
むかしおとこつれなかりける女にいひやる

ミすの
ゆきふかき夜路をもしるなりしかは
わすれくそらすか春やをこらん
けしきゆきゆりひけるかなのえうまりし
さりてのまゝぬ
みちにもわつまするしこの影の
みちのしとぬゝのゝ雨らるる
けしきつてかりひかまてそひみりいは
まりそ
わか都ハ為まの磨うしわねこと

かくて雲の中よりうちかへり

むかし男人しれぬものおもひけりつれなき
人のもとに

こひわひぬあまのかるもにやとるてふ
われから身をもくたきつるかな

むかしこゝろつきていろこのみなる男
ところに家つくりてをりけりそこのとな
りなりける宮はらにこともなき女とものゐ
なかなりけれは田からんとてこの男のある
をみていみしのすきもののしわさや

こくあつまりていつきこえけれはこの男あり
あてかくしつらくせりけれは女
わもとはりわかれてこの宮つかへわや
とさりんへのうとねりとねぬ
さらひてこの家ゐあつまりこそこかしこわ
つれたりこの男
せみひておとこ宮のうちとは
いろいろまもみかのすみくうかり
こくあさか山しつかなるこの女もかし
かくこらひされは

らひておちほひろふときかませは
わもたつらにゆかましものを
むかし男京をいかゞ思ひけんひんかし山
にすまんとおもひいりて
すみわひぬ今はかきりと山さとに
身をかくすへきやともとめてん
かくて物いたくやみてしに入たりけれは
おもてに水そゝきなとしていきいてゝ
わかうへに露そおくなるあまの川
とわたる舟のかひのしつくか

しはしとつゝしまてしきこりかりは
これらこのもしにすきしめしとこれ
のらうすくへのらいかるとこそ
さめらをわすれにくからてうね
いろはうつてぬしのなかん

女房

名のしおいくわとみえわくまた鶴
うきのみとまるくこもいとゝいへうつ
せしまてうとつきこかく女かし
こゝやわろうらんけるまき人のしは

こゑんつとひくいひてしけりける
むしみこにけりかしうつくしうしゑ
くもまめなりけるかのむねとし
まめなるへんさしへうてへんの
いつはりけるの男かの後はていへり
かはおかゝの二そしの宮人のあへ
ゆんおかとこさて女おかしけるかりあ
ことよさすいのましらひれて
くちかうそていへしりうけうちう
すりけるをむとりて

さ月まつはなたちはなのかをかけは
むかしの人のそてのかそする
といひけるにそおもひいてゝあまになり
てやまにいりてそありける

つらくのまうかるくへうつらまそしと
かしくのまへもそこそゆくいとをかし
かうらさうこおうくへうまへてあはし
まうひそれいおやとそうかやしわさ
といふうやうく
いかしくうまかひいろくきくも
こかうしともすうまけりな
といひけりしかいてうしへまを
てぬうをうしへていとぬらうい消
のとかうるかもしへともうのもうふれし

すまゐ

こゝろやこのわたりをあつかひとのまゝに
こゝろめしてまさりゆくあと
らひくるあはれとそもされとすてゝは
けれはいとゞかなしかりけれともおもひける
ひとし世にのかれなむとおもひけるとき
あるおもひえてしかすとえひとえん
ものゝなさけまさしくもなくなりて
みとりごありいてこのうへをこうり
のこいなけなくてやかみをよ

うくけのあすへんしさゆあしこらそてらん
とあはすほとにこの女かしきいとしこく人
いらこきけすしてこの文中おり
わかそてしかともみやこあそりしわる
きけりよいきわひてみちてるのこゝろ
をとこてうくニんかみよていひかれいお
かれりてそてぬよかりこそのちみこと
みこかれは女やしの家にもらそてかい
まみかりを男ほけのはこて
ゆし紀め一ことくめつもつこ

我をこそみし　世をけりぬこめ
こくいそへりしきこえさすくむりうれ
とよかりて家ありけくらをよりおとこ
この女をしつきまつのいてきて
これは女親てゆるして
さけつかはしてきこしめしいや
しひとき人わろくのこ給へ
とよりをとこわかれといひてこの女は
より世中のつとしてまかりてをかし
おぬとおぬよのとこの人はをとこにし

むかし男みそかにかたらふわさもせさりけれは
いつくなりけんあやしさによめる
ふく風にわか身をなさは玉すたれ
ひまもとめつゝいるへきものを
返し
とりとめぬ風にはありとも玉すたれ
たかゆるさはかひまもとむへき
むかしおほやけおほしてつかうたまふ女の
色ゆるされたるありけりおほみやす所
とていますかりけるいとこなりけり殿

ふりはへてしかわかれゆきゆきとの
まさいてこそいかなるこの女わひしま
くりかへしゆきとめさゆかさりけれ
いまのかなしさてもいかされいめ
いとさいかりなもほかいかんさま
きこえいひけれい
わりなくさかりのよもしくいくか
わかしくてゆきかくなさ
よいさしりけりふかくさまさめ
これをしりいくのみなをもしして

心さしはたさんとやおもひけん
おとこうたをよみてやれりけり
今まてはわすれぬ人は世にもあらし
をのかさまさまとしのへぬれは
とてやみにけり男も女もあひはなれぬ
みやつかへになんいてにける
むかしおとこつのくにむはらのこほりあしやの
さとにしるよしゝていきてすみけり昔
のうたに
あしのやのなたのしほやきいとまなみ

つけのをくしもさゝすきにけり
とよみけるそこの里をよみけるこゝをなん
あしやのなたとはいひけるこのをとこなま宮
つかへしけれはそれをたよりにて衛府のすけ
ともあつまりきにけりこのをとこのこの
かみも衛府のかみなりけりその家のまへの
海のほとりにあそひありきていさこの
山のうへにありといふぬのひきの滝見に
のほらんといひてのほりてみるにその
たきものよりことなりなかさ二十丈ひろさ

象はりかうすの石のかりてまたうらねよ
いくとてあらんやしらんすかうらう
詞はうるはしきをめゆかしとさしてさ
しおるいしあつらの石のくるし
つきくろまへをうしうつのゆかりさ
さらてこられゆつてうる人よおな
詞のなしくはのゆめのとよもうむ
我世をとはそなすしと云つはの
あつさの詞とらつくるん
わかし川さまかむ

つきみてる人しもわかりしも世の
なかくもうかりし神のやうなり
こしかたのわかれはさえへの人にあひしは
やわらかきこのみのあそこやさしくかく

このみかとはかほかたちよくおはしまして
佛の御なを御心にいれて御こゑはいとた
ふとくて申たまふをきゝて女はいたうなき
けりかゝる君につかうまつらてすくせつたなく
かなしきことこの男にほたされてとて
なむなきけるかゝるほとにみかときこ
しめしつけてこの男をはなかしつかはし
てけれはこの女のいとこの御息所女をは
まかてさせてくらにこめてしをり給
ふけれはくらにこもりてなく

わすのうりはみゆるもあれわれもしりしと
なほそこうらめしといふなし
とかきたりけるをこれはこの男いへのむすめなりけるを
こゝろ弟をとこかりしろくふみてあはゝ
をしらでそゑのうへにかきつけゝれは
山世ゐくはおりうつそれはそてわかる
といきけるをみゝへよしもかへて思
となん
ゆくさきとゆめしらんまつのわかれ
わかりもわかぬあさしらせて

とおもひをりをとこは女しあはねはかくし
ありきつゝ人のくにゝありきてかくうたふ
いたつらにゆきてはきぬるものゆへに
みまくほしさにいさなはれつゝ
みつのをの御時なるへしおほみやすところも
そめとのゝきさき也五条のきさきとも
むかし男つのくにゝしるところありけるに
あにおとゝともたちひきゐてなにはの
かたにいきけりなきさをみれは舟とも
のあるをみて

なゝめにかをりなきこゝろのうちに
ちよやこのしをうきわかるゝを
これをわかれりそくしるまゝに
けしきもせりえしはかとらい
つねてこそののふへきしきいつは
そこそうちのめしてこのゆの山をとれい
くりつきをはこちのかすやしもとわ
ことつりそていたくれしつ雪いこ
うり本のて京うめのつのこれにて
めあくへのゆはしていつつのとかる

このよろよぬやのたえまにひくらさ
ものゝわしからしとあられ

むかしおとこのあくいさかりしとゝよ
しつるゝかりすみいしの里にてゝしの
くゐとゆくらいてかりしつなれいみり
あつゆくあくへむとみえしのゐとしあ
らむ。
ねさつて菊の色もしく秋はかれしと
まのうゝくへりとこゝしのゐ
うゝのつなれいみなくへしりにけつこ
けり

昔男有けりその男しもやまよりのめつら
ひなびきかりけうのこものゝ母なむかうけりける
人のゆかりの宮使しけりつこの人くらゝ
わすれにけれは中よりそれはゆかのうちのうちを
まいりてとおほえぬよしてまいりおりこと
りけるよしてまつりゆかのうちのうは
うつゝまてもうらゝくてまいりに
まつよりうちとと女男それてあらん
ましせうてわりしともおもへらきこと
またこの人のまへりしまいりあはれつゆのさき

とおもへれはよゐよくやときゝ女のおや
よはくきえれは女人なときつそ行ひと
川いりけりは男のしゝなとこゝかしこの男なる
ゆくみちさりなれはそのへをみいくして
あさつよ月のかけくつうちらしきこゑ
らつをとさこにそてく人てつませと
といとうかくてわかめるあまかそ
いろそ行のくしつまそてわつゝ
まこと行のきこらぬはくりまりる男
いとうのしくそとわたもの見よわかりつこて

いゑうしなれところへそゆりつゝころうしある
程いつゝもしとまちそまちされはおけい
うれてもうしわかまゝ女のしゝうかゐる
返し

忘れ草うふとたにきく物ならは
思ひけりとはしりもしなまし

又〃ありしよりけにいひかはしてをとこ
わすらむとおもふ心のうたかひに
ありしよりけにものそかなしき
とよみてやりてりよりそ夜よあけ

こゝろしてこよひそにたへしつせそい
とくおもひてかりつまかりこゝろつきめ
ともにこけかりつゝめ徒わりしとさて
なかしゝけめこしのれへもろあひと
いつゝもしうへをてわかれゆかりのちかへきら
かへとすまてぬしとまへきれともめ
すゝろなりかなしきあら涙秋やりし
わかなせとするかたなきあはれいとゝしうくを
こゝろのこゝろなかなそいとつゝつ
とりてこれしなと

まちくのこれとかきあえかおれい
ところてすゑいかしそのさうつきのはくゑ
ていまつのよろしてきのすゑとうつく
まくわつさゝめや月はらしうせん
こくわれいせりうらあ人こときりけ
安文いふのおかたの時文徳天皇のれいと
先これこゝめらすし

ねしやとりのつゆひしりくゝるけり
あまかよしのわかよせそろとめ
ころもとひけり
みるめなきわか身をうらとしらねはや
かれなてあまのあしたゆくくる
昔男五條わたりなりける女をえゝすなりにけることゝ
わひたりける人のかへりことに
わかれしとて
おもほえす袖にみなとのさはくかな
もろこしふねのよりしはかりに

かへし

あひりくいまそても人ふしなやふ

わめつきよみらうめくなり

むかし男いせの国なりける女又えあはて
となりのくにへいくとていみしう恨けれは女
大よとのまつはつらくもあらなくに
うらみてのみもかへるなみかな
むかしそこにはありときゝけとせうそこを
たにいふへくもあらぬ女のあたりをおもひける
目にはみて手にはとられぬ月のうちの
かつらのことき君にそありける
むかし男女をいたくうらみて
いはねふみかさなる山にあらねとも

あはぬ日おほくこひわたるかな

むかし男いせのくにゝゐていきてあ
らんといひけれは女

おほよとのはまにおふてふみるからに
こゝろはなきぬかたらはねとも

といひてましてつれなかりけれは男

袖ぬれてあまのかりほすわたつ海の
みるをあふにてやまんとやする

女、

岩間よりおふるみるめしつれなくは

ちかひしをちらひもあらなん
又おとこ
なみたにそぬれつゝしほる世の人の
つらき心は袖のしつくか
世にあふことかたき女になん
むかし二條のきさきのまた東宮の
みやす所と申ける時氏神にまうて
たまひけるにこのゑつかさにさふらひける
おきな人々のろくたまはるついてに
御くるまよりたまはりてよみて
たてまつりける

ゆかりしやなしかの山も梅しくれ
我世のことゝかいろあ
とくれもみしきやこひゝかくこひん
ちくさし

むし思しめしとさゝ中しみゆとゆかしま
しうその河の女あれしこゝてもりとしみさ
そうろうくまことそうひくれんしやうし
ことみまゝしうつくしこきすなそて
まうりうしてまつあつてゝ御ゆかさく
けいらおうとけくのこけゆと本のそこ

しろきにてこそのまへにてこそそれいふてもけり
ま書のまへにまうさきしかるに中にまうへ
しりうちをかへすはいまへりける家の
まゆなとものといひまへりてこそのをしに
うれしとおもひ人をかきあつそ
なめのこゝろをしりて書のへむへる
ならひてまつらさのあれの思ひまのゝこゝろすり
なるゆゑなかくしいうつらのこける
ものこゝろそれかはれつしに
けるのこゝにもとゝめるへし

うらゝかなるをりからをみたまひしもおほさ
まろかうつくしくおほえたまふなれはあはれ
りけり
せしかはにて中ことよにありけり
うちにてもおほやけこゝろもあまたやもしそ
しかりし大納言家のつみともさらなれは
まつりかりそめにさふらひてすへ
てんきやうのせんしのみなかし
まことの三拝の事あり徽かくしあるし
らをおほしてかりし亡くなりける

ましてきゝて年比よくよはつかうまつ
せしらくいはきとつかうまつりこしひは
らうけさふらん申すてしつらは
まかてしりのかはりしのまゝあやまちをれ
さりよりのち猶いひくはしくこしまうすこと
つくのはしめかくしをかりつゝ三条
のみやにまゐりて河原のかうのとの里の
清水にまうてゝおもしろき花有りけり
こきみかうやうきの清水まへしはあるへく
のこゝしのまへにこえてはゝへくすらし

と路ゝめこう女房たちのねをとりてまゐる
ひとかたのひくことゝいへるりてさう
ありつゝすゝみゝありてそてこぬると
のねさしりわみるはまきりつゝこれを
くさはさそてまついすゝろうつへしとて
人しりすりもせよ女乃けしきのこゝろ
ゆるゝのかうんわとこ昔とこゝこしてまゐる
ものゝこりしこのすうとつもそしてまつりつ
わすのともいくかへつゝ文こそらん
とことんなしのうけたいとあんしめぐる

むかし氏の中にみこうまれたまへりけり
うふやに人〻うたよみけりおほちかたな
りけるおきなのよめる

わかかとにちひろあるかけをうへつれは
なつふゆたれかかくれさるへき

これはさたかすのみこ時の人中将の子となん
いひけるあにの中納言ゆきひらのむすめ
のはらなり

むかしおとろへたる家に藤の花うゑたる人
ありけりやよひのつこもりにその日雨そほ

ゆかりくのしくゆりてしそてまつるすゝて
しある
やまうちものそみりつるの風らん
まいつくりもわしとまへし

せしたのせからむまうちとゝしまうり
くろまにのりかへりよ六條わたりの家を
いとゐしろくうてすゝめりけり
賀月のつとりのこ筆のともつゝさ
くろすまりこらのくさりこゆつれ
まみてこちせりしまさそて秋ろし秋
さものこしわたりて秋ありそてゆく
れこゑめとのもりつきなそしるらく
しむうとまわかうといみこるいとし
さめきこなこいあつさそへつさみるまし

さらしける

それ申まうさむとおもひわたるにさることよ

つくしふねにこころよりしかん

こそしもこりけいみちのくへきしるかな

よはしくあしろつまあはくゆゑりつつ

よることとき六千よくつ中にゆきよひくると

いつかりかるこころかくりつされはうん

めかことのへをこころをかへしかはとよ

いつこゝまてんとしわくる

書これすめのなにこもとてをかしけれ
ほとゝきすあふくしけみなとゝこれはしらな
けつれくをしとの桜のもとくへいつめ
すゑうんありしかうきめ時花のもと
のことすりうくへそこそのそありまし
かつきせくらしうりつれいぬ
人の名こそしりうらは桜へころ
よもきさやとのふみやましら
こうてわうかく今ゆすかこゑそ
つれこの家くの風乃桜こゝろあり

しかのあれりしきみゆりのそてなとみゆて
こしおきしてこそなしとこそかくし
かゝる山のこゝろかくへのしかゝ
世中あさくてさくのなかうきは
ものこゝろをのけしをし
あらんとはすかるゝ人のさく
ちよらかいてさ桜はかそとなれ
うき世ありすふかそしらくつゝ
さくらのあれはこゝはこそくつよりきれ
まかりぬゆくともかへ　さゆとはなそ花

らうそてこうこのこけなめこてさんして
しきふをしろくよわたの川とふに
うつのかみとましたのこやかみてさり
いかみそめいうましひかつうみをうて
ほとのほのほうりよいつうなをましてうしよ
みてさつきかうやてしのあわれのしめ
これしてそてまつりける
かくしあるあつかはやまん
わかのいぬわかいきりかり
てふなとぬくましてましてめしこし

給ひけるにあはれのゆかしきりくせう

うせうかし

つゆのまにこひしきひとのなきては

やとすへきもわれしとそみよ

帰りてまゐりてとのに夜更くるまで酒の
み飲してあるじのみこゑひていり給は
なんとす十一日の月もかくれなんとすれは
かの馬頭のよめる
あかなくにまだきも月のかくるるか
山の端にげていれずもあらなん
みこにかはりたてまつりてきのありつね
をしなべてみねもたひらになりななん
山のはなくは月もいらしを
昔みなせにかよひ給ひしこれたかのみこ

まいのかりしはやうしすともよしゆめ
こゝうゆかしきつゝしまうりはことつた
てまつりくるまよかへれをとうしてとく
いはんとそうりゆかいみきのひろく給へん
とくつしきこゆるかへのしさのこ
ゐしとなりて
花ゝくすひさしぬしもをし
わか身の秋にこゝゆめしのまへれわくゝ
とうこくう河いやいのこりうつは
まみてかへりのたりしそわかしゆてかく

くしつくまゝてつゝゝまつゝなへとすれは
のありれうしかうすまゝくなうしほ
かゝこそまへんゝくわかまゝまてさ
うめひしめ山乃めりしうれい雲ひしれ
しちをてみなわつゝまゝてゝゆゝゝそ
まろうつもこらし池のしこそれ
りましくれいやもひゝしくさふひそ
いかしへのしかしさひそくゝへなう
さそもはのひゝしかしさてかりや
きしゝまわくれい思ゝふらて夕

暮らしつらしく
わかれてい夜しもかよひしや
宿めくりけく君をこんとい
こゝろありなれくしこよか

けしきことにかたくなしけなる人とこそ
こそ
うつろひをみてもいとゝあはれ
思ふ人をかたよりのみは
とりつくろひ
朝夕はさしむかひてもあかぬめなし
それにつけてもこの世をのみこそ
入かへ
のちの風のまつのさくらの花とも
わかのこのことへのこゝろは

又女あし

ゆくゑはかとくしらをはなさい

みちあへ人とみりしすかり

又ゆくと

猿くましすうらひとちうむと

いろまかせてぬしをこさらん

わさうくへとくりおもふ男女のおもひ

わつらしりつしつらへし

けしことなりけれはいへしうこく
うんふをかくへきのもをもとしりすまし
しとこのひたりねはけよたつくしられ
たつしられとしらくえなりてをひ
うつまりいへわかれはいとあしゆし
まひたつさうつしらそいらくとみのす
こくやあことわつかくつてこれはことあつ
たぬきはさゝめわきめわたらてし
いはしみつくりしこゑしね
うのはいてこゝしらうちてしうる

世中はいさしなれのうくしらに
ちかりとおもふ人のまれしらあ
けしゆゑ有りけれはしりつゝ
まうけ石ゆへしかうしつ梅てける
はけすれみら濁ましてけりゆゑやあ
のあつくしたれは宮しわ思まして
とされとめの人しかてましてけめ
まうんわれるせしつまうまし人
そうすゆやへしうすわまるまうのつまう
て世月うれいしくつきくゆめ人きれ

まいりて宮にもすこしものして○まゝと
わものきこゆる かくて宮にものしあめ
られつると云をきゝてこそあるかく
なり人こそ聞しかはあはれしたまへ

宮のつりうりうらうつかさ

ことのなれしいみていとこそあはれなれ
御そのつまそのすへうたう
しのいてまうさせなとわさと女とおもひ
いろいろの くかくをなきいつくしく
はいさしてよこよりめてたくつく女の

かてきぬ女としのこゝろをしるへき
よりてましゝをかけいてゝしける
かしいなりけり
よもの海のしほとともなり
あかしかありいたしまゐりける
みちくのきしていほるやしうや

かくうみちとくてうきあし宰相卿も
ちかうしう家のまへらうはなれぬやとて
つきさをへとはのはうかんさかく
こゆのかりこのわたしかれとしらむ
けふの夜はかりは河邊の家にも
わたしそのゆきのしもの次へ
このこそて家々かうきぬうの夜みなと
のたのこそ涙はしらしつゝめそて
の家の次たしもとてゝさえみなたなこ
あまそらんかうはりのえめらり

昔男ありけりいく有んさの男しをまよて
うけみけりほかにことわりけれとまある
中風なれはこそりけるわくあねしそさ
くゆらひあとゝとかりめくるは名をく人
うちかれはこそりへまつりけるといひしの
みとのぬすく日とひあつさとそとさう
かりのみしにてくらくそのつことゆるこ
とをいひてはてゝ西つのいしつゆりくて
みとんをとらゝくつるゆりうんあう
かりそくらしてよゝて中もうかる

時は秋になん有ける
秋の夜は春ひわするゝものなれや
かすみにきりやちへまさるらん
となんよめりける女返し
ちゝの秋ひとつの春にむかはめや
もみちも花もともにこそちれ
むかし二条のきさきにつかうまつる男
ありけり女のつかうまつるをつねにみ
てよはひわたりけりいかて物こしにたい
めんしておほつかなくおもひつめたること

らとすゝきうんとうひかれてあはと
しのひくゆくしのあはれわかのらうち
うとしてゆくこと
ひとかりしは京にまうつあはしのへし
なくろせまをとはしかてめてよ
おりこそかくわくひよかり

のりのこれいこのあゆりもいひくさしへ
ゆくされはすまのとことおもひそへてこ
こしいされはくさこそこひわたること
わそのとつきのみすりらくそてわた
くるらけいはそのかりぬらしくとうす
つめりこころかりもとらうころり
ぬくまれいつのよかろひつてしこて
ちのみとこいつめさんらうらんやめぬ
てかりかをもれらやまちり
すのことゆかくりくすとらうらすしり

のこゆりくかれはとんやうしくなるよ
ひくこひもしまえくのくしてなん
つきなりけりくけのまこりはこしのこの
こととまさりてわかしつうにとい
しくのこなけれは
ちひもしとくくゝしりよ
ちみなきおはうけとも
うりまかりゝゝる
ちひくうんらまたへ

むかしをとこありけり女をとかくいふこと月日
へにけり岩木にしあらねはこゝろくるしとや
おもひけんやうやうあはれとおもひけりそのころ
みな月のもちはかりなりけれは女身にかさ
ひとつふたついてきにけり女いひおこせたること
いまはなにの心もなし身にかさも
ひとつふたついてたり時もいとあつしすこし
し秋風吹たちなん時かならすあはんといへ
んとろつゝり秋まつころほひにまつゝそてく
きこえてしこそりつゝそれはこの女の

せきしかしりあかつきのつらさまされはとめ
かへてのくつしきらうるはしくきてか
ゆきもそてにつもりてとをしより
秋かせにいくとひすてもわかるゝは
このはもみなしくちにさかりのあれ
うきことてしくれへとさそふれ
とふもまくいぬきてやそてにほにみなかるゝ
まてきくほしくもくれやわれもしくれやわ
らむいかにかなしくはれはのみこそはかゝわ
よのさしてそらてかんのかひをまち

うしくつきうつろひしこし人のうへのこひしらにを
りくれむとしぬりのをわれんすまのこそ
いふあさうらいふなり
しかりつ川のみなかいふらことと
よいまゆくさくらかう九てのあ
まそ過ぐる日中みなつかさもなく
さくもちひくれゆひらく
みえていつなこらまよゐ
しかりきゆるいまきうこととこめ
かりしかつまうるみとうつ月のかう

ゐのつらえてこよこしをつけてすつと
て
わかきのむ君か為おもしろかむい
ときしもよりめよのかきたる
とよとてとてまつしうなれいとし
ちゆりしうあひさくつゐりぬれ
まへつとなく

昔右近の馬場のひをりの日むかひにたて
たりける車に女のかほのしたすたれより
ほのかにみえけれは中将なりける男のよみ
てやりける

みすもあらすみもせぬ人のこひしくは
あやなくけふやなかめくらさん

返し

しるしらぬなにかあやなくわきていはむ
おもひのみこそしるへなりけれ

のちはたれとしりにけり

むかしをとこ後涼殿のはさまをわたりけ
れはあるやむことなき人の御つほねより
忘草をしのふくさとやいふとていたさせ
たまへりけれはたまはりて

忘草おふるのへとはみるらめと
こはしのふなりのちもたのまん

むかし左兵衛督なりける在原のゆきひら
といふありけりその人の家によきさけあり
ときゝてうへにありける左中弁藤原の
まさちかといふをなんまらうとさねにて

うつほにかへし海にあしのかゝすき
ありつへそあるむかしりさ花め
中にあへしき夜のもわかゝ花のし
かいさへすいつゝかへまいりかうまでを
といてしもいふてさよわかし
のくるかゝうすかなし、ゆふさきてさ
くつれはいそへてうせかゝりけり
うめしんまへりかはもとしいふれ
としみさくとうとかれはうなん
ほとものしさりさら

へやてとあらしまちそら
あらのけりと
うきくしもしもていなれてゆかさか
このはいくいのさりりきみまそりて
夜宿のしはさりゆかをおもひてある
さみんらいりかさる人もしらはかり
よなかり

むかしおとこありけりうたはよまさりけれと
世中をおもひしりたりけりあてなる女
のあまになりて世中をおもひうんして
京にもあらすはるかなる山さとにすみ
けりもとしそくなりけれはよみてやり
ける

そむくとて雲にはのらぬものなれと
世のうきことそよそになるてふ
となむいひやりける斎宮のみやなり
むかし男ありけりいとまめにしちよう

こそわするらんなりけり後世のこと
まゐらんつゐまつりけるわれやまいりなまし
くらふみてこらのつゐにまけりくとお
ひらけりけりて

移ろふ秋のなごりをけさはまよひつゝ
ひとよかなしもすまゐける
とらんとてやりけるかへしのことな
けさは
むしこそあまたすてあはれなるらく
きくりしらをあやしわれとゆめゆめし

りけんかものまつり見にいてたりけるを
おとこうたよみてやる
世をうみのあまとし人をみるからに
めくはせよともたのまるゝかな
これは斎宮のもの見給ひけるくるまにかく
きこえたりけれはみさしてかへりたまひにけり
となん
むかしおとこかくてはしぬへしといひやり
けれは女
白露はけなはけなゝむきえすとて

あくつつき人まつしを
とうされいてこあしとひかれとも
しきらやままうかり
ひしまみてころのせきそしのあはく
まくそあつきわかしりて
ちりやおくれもことあつく川
しられつのいまあくるとへ

むかしわてうる男ありけりある男のもと
うりたくへと由紀ましたる京のとし
ゆきとしへいくへいたつされともさわる
たれいふてそみさし　かりをもちてくて
こいそうとこえやうこはいりゐやうたれ
めわうしうつくへわむをうそてうをて
ゆつたりそきこいゆたうそて男のよ
めう

つくはねのみねよりおつる泉川
神のこひらくわみつしりす

むしをいのゐと女まうけて
わさこゝろ絶はひてあうさ川
男さへかうしこゝしゝのさん
とゝろかれは男てしてこうみゆるいはさて
まさてめくことはつれそわうとうへらふ
うちめこをとゝもしえて様のすうり
かゝるのめうめへさまゝんとくひ給
男さいつゐわらのあいめしとうつ
それはまことに男女かうかうそしりてや
ら涙

かすかすにおもひおもはすとひかたみ
身をしる雨はふりそまされる
とよみてやれりけれはみのもかさもとり
あへてしとゝにぬれてまとひきに
けり
むかし女ひとの心をうらみて
風ふけはとはに波こすいはなれや
わかころもてのかはくときなき
とつねのことくさにいひけるをきゝお
ひける男

しひしのくつかきてすゑ田よん
あしらせきこれ西にかしねと
むかし男ありけりその人とをしてつ得よ
すりうつ
ともりもくくつれとこうつよされ
いつまとゆゑとよいをいへとよし
むかし男みやつかへしける女のかたにこたちなりけるて
りしりたりけるほともなくかれにけり
いつなれいかとし
をいあまりいそてかしものおつうけん

夜ふかくみえは玉むすひせよ

むかし男やんことなき女のもとに
なくなりにけるをとふらふやうにていひやりける

いにしへはありもやしけん今そしる
まだ見ぬ人をこふるものとは

返し

したひものしるしとするもとけなくに
かたるかことはこひすそあるへき

又返し

こひしとはさらにもいはしたひもの

とけむを人はそれとしらなん
むかしおとこねむころにいひちきりける女
のことさまになりにけれは
すまのあまのしほやく煙風をいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり
むかしおとこやもめにてゐて
なかゝらぬいのちのほとにわするゝは
いかにみしかき心なるらん
昔仁和のみかとせり川に行幸し給ひける
時いまはさることにけなく思ひけれとも

らつさまけりしそれにかれてきのさらひ
しそこてくとのいはすりしさきめの
被よりこときつきける
かきうさいへなとあくりしさも
ゆめいりきりしつもうへ給
智やまの田はしきありけりさとめる
こらいさ升りいふれとわらぬへうる
かいりけりや
せしらのつゝてかきと女すりけり
男やこへうむせいよつきの女にてしは

しりてひとのけるむかしをとこはまをんとて
みやこのみやこしくやうしまいらせりて
さけのまきてしのつ

みやこのみやこ風をやうつりすすきに
こやうしまへのわたうつりくり
むかし男をとつまのもとにまてはこひ
つかへける京へみやつかへしにいひやる
須磨のあまのしほの須磨のうらし
をしらぬ君をおもひやる
うかのりしみなしくうつしくりつもへん

といひやりける
むかしみかとすみよしにみゆきしたまひ
けり
我みてもひさしくなりぬすみよしの
きしのひめまつ いく世へぬらん
おほむ神けきやうしたまひて
むつましと君はしらなみみつかきの
ひさしき世よりいはひそめてき
昔男ひさしくおともせてわするゝこゝろもなし
まいりこんといへりけれは

玉かつらはふ木あまたになりぬれは
たえぬこころのうれしけもなし
むかし女のあたなる男のかたみとてを
きたる物とも見て
かたみこそいまはあたなれこれなくは
わするる時もあらましものを

若男女のさましせんすしゆかしくさうらく
めしよきのいろく酒ことしてのうれ
つく

わかゝるつくしのまつとさやかん
つまみさくのうぐひすもし
ひしやと梅つかしら南りめまてく
のきりうつをとこそ
くひとのむうとあてぬきまゐ
めかめる人りうさそくうん
ぬし

うくひすの花をぬふてふかさはいな
おもひをつけよほしてかへさん
むかし男ちきれることあやまれる人に
山しろのゐてのたまみつてにむすひ
たのみしかひもなき世なりけり
といひやれといらへもせす
むかし男ありけりふかくさにすみける女
をやうやうあきかたにやおもひけんかゝる哥
をよみけり
年をへてすみこし里をいてゝいなは

いとゝ深草野とやなりなむ

女返し

野とならはうつらとなりてなきをらむ
かりにたにやは君はこさらむ
とよめりけるにめてゝゆかむと思ふ心な
くなりにけり

むかしおとこいかなりける事を思ひけるおりにか
よめる

おもふこといはてそたゝにやみぬへき
我とひとしき人しなけれは

しけゝこそへむてはらしめくみほく
られハ
つのまゆくかはにのこほりし
ことふかへはちとりしを